

【 2 】

氏 名	中 村 二 柄 なか むら に へい
学位の種類	文 学 博 士
学位記番号	論 文 博 第 101 号
学位授与の日付	昭 和 51 年 1 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	美術史学の課題

論文調査委員 (主 査) 教 授 吉岡健二郎 教 授 辻村公一 教 授 岸 俊 男

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は植田寿蔵博士の「視覚性」の理論と、バーゼル大学美術史教授ハインリッヒ・ヴェルフリンの「表象形式」の理論とを根底に据え、その上に立って新たな美術史研究の方向を探ろうとするものと考えられる。

全体は五章からなり、更に「要約と展望」と題する一章が付加され、A 5 版で 500 頁を越えている。第一章は「美術史の自律」と題され、「視覚的表象形式の問題」、「文化史・美学・美術史」、「美術史の自律」の三節を含み、その分量も 120 頁余に及び、全体の序論という性格を持つが、同時に筆者の根本的見解を示すものとして最も充実した部分と考えられる。即ちこの章において筆者は現代の美術史学がややもすると自己本来の対象たる美術自身を忘れ、「時代精神の診断学」の如きものに逸脱しがちであることを嘆き、むしろ一般には既に過去のものとなされがちなヴェルフリンに再び立返って出発し直すべきことを説いている。

ヴェルフリンの著「美術史の基礎概念」はその着想の新しさによって一世を風靡したが、一方その形式主義的傾向に対する批判もまた各方面から加えられた。本論文の筆者もそれらの批判が必ずしも不当ではないことを認め、それ故にこそヴェルフリン自身も最晩年に至るまで自説に検討を加え続け、視覚形式の概念の修正に努めたことを詳述するのである。ただどのように修正されるにしても「造形芸術は眼の芸術として、それに固有の諸前提と、それに固有の生命法則をもつ」というのがヴェルフリンの立場であり、また本論文の筆者のそれである。「造形芸術はそれに固有の言葉をもつ」のであり、「そうしてこの言葉は同時に思惟でもあるが、すべて生命あるものと等しく、一定の成長法則に結びつけられている。造形芸術におけるこの特殊性を感受すべき一つの器官をもつことが、はじめて人を美術史家たらしめるのである。」

ヴェルフリンの「基礎概念」発表以後、二十世紀の美術現象は正に激動の時代に入り、美術史学もまた新たな自己を見出すべく努めている。しかし現象界の「激動のために美術史学がそれ自身の原理まで見失ってはならない」のである。「美術史の自律」を説くことは「独断的な排他性や非歴史的な孤立性を意味

するものでない」ことを筆者は充分に知りつつ、尚且つ美術は他のいかなる領域から演繹されることも、また他のいかなる領域に解消されることもできない固有の歴史を持つが故に自律した一つの学問領域をなすと説く。

第二章は第一章で表明された筆者の立場から「芸術社会学」、「芸術と社会学の弁証法」、「象徴環境論」の三節を通じ、美術を社会学的視点から扱うことが多くの示唆を含みながら、結局美術の本質を美術以外のものに解体する結果になることを説いている。取上げられた学者はハウゼンシュタイン、フリーチェ、ハウザー、パウルソンであり、これらの学者の説を紹介しながら、これらが美術と社会との連続性を強調しすぎ、美術と社会との非連続性の面を無視する傾向を持つ点に批判を加えている。

第三章はパノフスキーの図像解釈学に対する批判である。筆者は彼のヴェルフリン批判が「基礎概念」以前の論文に向けられたものにすぎないこと、またパノフスキーの立場にしても、それは「科学的客観性を徹底しようとして直観性と創造性を閑却し、……美術を事物へと解消するもの」として批判している。

第四章は「構造分析論の明暗」と題され、ゼードルマイアの著「芸術と真理」の批判が中心となっている。この章で筆者はゼードルマイアが「美術現象をひろく人間生活全体との有機的関連において把握しよう」としながら、彼の立場が倫理的、宗教的規範に拘束され、結果としては美術史の自律を脅すことになるとみている。

第五章は「表象形式より先形象へ」と題され、ここではヴェルフリンの「表象形式」の概念を受継ぎつつ、それを深化させたものとしてガントナーの先形象に関する説が詳述されている。筆者によればガントナーの立場は「美術現象の心的源泉を究めようとし」、「美術的創造の過程」そのものを掘り下げ、「創造過程の唯一の担い手としての美術家の人格性の意義を明らかにし」、「美術史における人間と歴史とを恢復するもの」として高く評価される。「先形象」の説は根源的な意味での想像力を明らかならしめようとするものであり、パノフスキーの図像解釈学やゼードルマイアの構造分析論そのものを、美術史の立場に立って正当に基礎づけるものとさえ考えられている。

以上の五章においてヴェルフリン及びその説を継ぐガントナーの立場を擁護したのち、筆者は「要約と展望」と題する結びの部分において、ガントナーが「先形象的なものの特殊な価値を発展させてきた東洋、とくに中国と日本の美術が、現代の地球的な様式の前途にもつべき役割の測りがたい重要性」を指摘している点に注目し、先形象の理論の中に新たな世界美術史の可能性を認めている。

論文審査の結果の要旨

本論文はA 5版 500頁を越える労作であり、筆者のこれまでの研究成果を集大成したものと考えられる。

筆者は昭和19年本学を卒業後、植田寿蔵教授の指導のもと美術史研究に専念し、既に「芸術精神史研究」（昭和25年）を上梓している。その後さらに美術史研究の方法論的反省を深め、ハインリッヒ・ヴェルフリンの「美術史の基礎概念」に立返り、そこに自らの出発点を見出した。従って本論文の筆者の立場は、ブルクハルト、ヴェルフリン、ガントナーと続くスイス・バーゼル学派の学風を継承するものと言えよう。筆者が指導を受けた植田教授の学問的立場はドイツの芸術哲学者コンラート・フィードラーと親近

性をもち、ヴェルフリンもまたフィードラー、ヒルデブラントなどから深い影響を受けていることを思えば、筆者がヴェルフリンを代表とするバーゼル学派の美術史学に接近するのは極めて自然な結果と思われる。

ヴェルフリンの様式批判的美術史学に関しては深田康算教授が既に言及され、歴史ならざる本質論としての美術史と、美術史ならざる美術史即ち文化史の一部門にすぎぬものとしての美術史との間を行くものとして、また美術史家の自己反省から結果したものとして高く評価しておられる。本論文の第一章「美術史の自律」において筆者が論述しようと努めたのは、まず美術史はその対象の点からして自律的な一価値領域である美術を取上げるものであるから一般文化史や精神史には吸収されぬものであること、及び美術は「視覚性」を原理として成立するものであり、しかも「視覚性」は根本的に歴史的事であること、の二点である。即ち美術の本質論と美術の歴史的展開とを統一的に把握することに向けられていると考えられる。論文全体の中で筆者が最も力を傾注した部分と思われる。筆者はブルクハルトの「美術史家とは天にも地にも席を持たない人びと」であるという言葉を用いつつ、哲学的美術と資料に基づけられた歴史との境界に立つ困難を敢えて引受るところに美術史の役割があるという見解に達している。

本論文の第二章から第四章まではヴェルフリンの自律的美術史学に対する無理解乃至は誤解から生じたさまざまな批判に対する反論であるが、これらの章を通じて筆者は視覚性乃至は表象形式という基本概念の深化徹底を意図している。その作業は主としてヴェルフリンの学説を発展させたガントナーの諸著作に依拠して行われている。ヴェルフリンの立場が視覚の独自の意味を強調しながら、尚且つすでに形成されたものとしての芸術作品の形式そのものを重視するという形をとり、従って内容的なものを閑却したという諸家の非難は必ずしも不当といえないものを持っている。ガントナーは師の学説のかかる不備を補うべく、視覚のより原初的な発生状態にまで溯り、形式と内容とがそこから成立してくる母体、或いは萌芽のごときものを問題とする。彼はかかる研究遂行の上で有効に機能する概念として「プレフィグラチオン（先形象）」という新しい語を提示した。本論文の筆者もこの概念を肯定的に採り、ここにヴェルフリン学説の「拡大と深化」とを見ている。筆者はまたこのような視覚の根源へと溯行することによって、地球上の各地域、各民族の文化が生み出した諸美術相互の根本的な比較検討も可能になると考え、東西の美術がその最も深い層において触れ合いつつ、やがて地球的な規模での様式形成へ向うことになるとしている。

以上の如く本論文は美術史学の課題を視覚性の究明にあるとみる立場で貫かれている点で植田教授及びヴェルフリンの見解を頑なまでに守っており、それが美術を美術以外の価値領域へと解体しがちな現代の美術史学の傾向の中で、おのずから美術の固有性を再確認する結果を生んでいる。ただ本論文の筆者は、バーゼル学派に傾倒するのあまり、現代美術史学界において無視することのできぬ業績を挙げているヴィーン学派やヴァールブルク学派に対して極めて一面的な評価しか下しておらず、またバーゼル学派自体に関しても、その理論の根柢をなすフィードラーについて表面的に触れているにすぎない。ことに最も根本的なヴェルフリン批判とされるクロウチェの立場を、ガントナーの再批判の言葉だけに依拠して斥けているのは遺憾である。しかし視野の狭さという欠点を除けばバーゼル学派の美術史研究の方法を検討した論文として、現在の日本では最も詳細なものと評価できる。

よって、本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。